



JEACS

福音讃美歌 ジャーナル

2021.7 vol.31

ハイパーリンク付 PDF 版



CONTENTS

Page

讃美歌関連書籍 ブックレビュー特集		
・『音楽と宣教と教会』	中山信児	1
・『黒人霊歌の即興性』	塩谷達也	2
・『日本における讃美歌』	井上義	3
・『言葉を歌う』	下川羊和	4
・『讃美歌工房歌集 II』	中山信児	5
讃美歌詞・公募案内		6
リモート讃美	植木紀夫	6

Japan Evangelical Association
for Congregational Singing

讃美歌関連書籍 ブックレビュー特集

2021 年の前半に讃美歌関連の優れた書籍が相次いで出版されました。本号では、その中から 5 冊を選んで書籍の発行順にレビューを掲載しました。ぜひ書籍の手に取ってご覧ください。

▶『音楽と宣教と教会』 関西学院大学神学部ブックレット 13 関西学院大学神学部編 キリスト新聞社

本書には、三つの講演とパネルディスカッション、三つの実践レポートが収められている。

水野隆一氏による主題講演は、教会の音楽における「分断」について幾つかの視点から論じつつ、それらを相対化し、乗り越えようという試みである。その糸口としてポール・バズデンによる礼拝についての類型を手がかりにしながら、リタージュ・スタイルの礼拝の包容力と可能性に注目する。他方、コンテンツボラリーな礼拝・音楽については、その存在意義を認め、一定の評価を与えながらも、批判的検討の対象と見ており、この姿勢は本書の各論にも共通している。次いで、宣教との関連で、これまで歌われることの少なかった幾つかの課題が挙げられている。著者は「多様性を認め合うということについて、私たちはどれほどのことを歌ってきたのでしょうか」と問いながら、事例として著者自身による訳詞と作詞を提示する。このような課題の設定においても分断は生じうるが、礼拝や音楽の分野でも、多様性を認め合うことで分断の固定化を回避することが大切になるだろう。

招待講演において、荒瀬牧彦氏は「われわれはなぜ歌うのか」という問いについて、アウグスティヌスやルターの古典的理解から現代の見解までを一瞥した後、「天地に音楽が満ちているから」「共にするため」「震わせるため」「染み込ませるため」という四つの答えを挙げる。これらの答えには、牧師であり賛美歌作詞者でもある著者の感性と問題意識がよく表れている。次いで、礼拝に仕える歌である賛美歌について考察



がなされる。実際のところ、礼拝や賛美は、信仰者にとってあまりに身近な行為であるため、実践についてのノウハウは蓄積されても、神学的考察の対象とはなり難いところがある。一例を挙げると「教区、教会の歩みにも着目し」て編まれたはずの『日本基督教団史資料集』(1997-2001)に、礼拝や賛美に関わる史料はほとんど収められていない。この点に限れば『植村正久と其の時代』(1937-1938)よりも、関心は後退していると言わざるを得ない。近年、ようやく関連学会の設立、海外研究の紹介、各種讃美歌集の発行などの取り組みがなされるようになってはきたが、日本の教会の現場を見ると、状況はさほど改善していないように思われる。本書にある様々な提言や招きが広く受けとめられ、礼拝と賛美についてより深く考え、取り組む人たちの裾野が広がることを期待したい。

中道基夫氏による神学講演では「宣教における音楽」が正面から扱われている。まず、日本のプロテスタント宣教史における賛美歌について

概観し、現代の状況について触れつつ、そこからインカルチュレーション(「文化受容」「文化的受肉」)について考察がなされる。音楽は、諸文化の影響を被りやすいだけでなく、良くも悪くも既存の文化を変容させる力を持っている。この点について日本の教会は十分自覚的であるとは言えず、本講演には傾聴すべき点が多々ある。最後に「教会の音楽・若者の音楽」について論じられるが、その際、先行する時代や世代への「反発」が、新しいアイデンティティー形成の重要な契機とされている。しかし、文化的営みにおいて反発と受容は相容れないものではない。教会においても、多様な現実や異なる文化と真摯に向き合い、それらを自己変革とアイデンティティー確立の契機とすることが求められているのではないだろうか。

賛美を考えるための刺激的な材料と情熱が詰まった本書が、豊かに用いられることを祈りたい。

＊本稿は「本のひろば」4月号掲載の記事に加筆したものです。転載を快諾くださった編集部に感謝いたします。

評者：中山信児(菅生キリスト教会牧師)

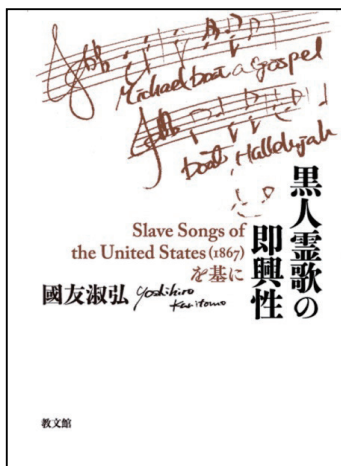
▶『黒人霊歌の即興性 Slave Songs of the United States (1867) を基に』 國友淑弘著 教文館

音楽が信仰、礼拝、伝道などキリスト教の多岐にわたる領域において、大きな役割を果たしていることは、キリスト教信仰者であれば、賛美が自身の信仰生活においてどれほど大切なのかという体験を通して痛いほど知っているはずである。しかし、とりわけ黒人霊歌やゴスペルに代表される、即興性を帯びた宗教音楽の重要性となると、真剣に受け止めている信者ばかりでは無いのではないだろうか。

この新作『黒人霊歌の即興性』は、そのような即興性を帯びたキリスト教宗教歌の持つ重要性を学際的に探求し、優れて実践的な神学の一つとして提示している。ゴスペルや黒人音楽に興味を持っている者はもちろん、今まで黒人霊歌に興味を持たなかった一般的なキリスト教信者にも読んでほしい一冊である。

日本でもこれまで黒人霊歌についての学術的な良書は何冊かあり、私自身もそこから多くを学び、拙著に引用させて頂いてきた。本作は、多くの黒人霊歌研究者がこれまで貴重な資料として引用して来たであろう“Slave Songs of the United States”(1867)を集中的、かつ丁寧に紐解き、黒人霊歌の即興性について考察を深めた博士学位論文に修正を加えた作品である。必然的にアプローチは学術的だが、内容は大変興味深い。南北戦争後、アメリカ北部の白人収集家が、南部において元奴隷のアフリカ系アメリカ人の歌、全136曲を聞き取り、初めて体系化及び楽譜化した曲集である、となると、アメリカ文化史に少しでも興味がある人であれば、まるでドキュメンタリー映像を見るように、情景を思い浮かべてしまうのではないだろうか。

私が、忘れられない一文がある。原資料に書いてあった文章だ。「奴隷たちの主人がある者に百回の鞭打ちを命じた夜、隣りに思った友人たちが夜の集会に集まり、数名の上手い歌手たちがその思いを歌詞や



旋律に織り交ぜながら何度も歌い続ける」。元奴隷たちが奴隷だった当時、どのように黒人霊歌が生まれたのかと聞かれて、答えた一つのエピソードである。

黒人霊歌になぜ心打たれるのか？その即興性になぜ心が引き上げられていくのか？その伸ばされ曲げられたメロディや繰り返すリズムが自分たちにとって馴染みのないもののなのにも関わらず、なぜ引き込まれていくのか？その答えが、黒人霊歌の真髄が、ここに込められている気がしたからである。

生活の苦しみの只中で、共感が生まれ、うめきが神への祈りになり、祈りが叫びになり、体は動き出し、歌になる。その歌に心触れられた仲間が、その祈りと叫びに加わっていく共同体の姿である。「二人か三人がわたしの名において集まっているところには、わたしもその中にいるのです。(マタイ 18:20)」と言われたイエスの心がここにある。これは、

奴隷であろうとなかろうと、時代にかかわらず、神に造られた私たち人間皆が求められている姿ではないだろうか。

そこから生まれた黒人霊歌の即興性は、リズム、旋律及び和声、呼応と反復、それぞれのエリアにわたって考察されていく。印象的な点をいくつか紹介しよう。

旋律に関して。歌唱者の会話的感覚、それぞれの知覚に基づく即興的な対応が許されているということ。つまり極めて個性的な表現が生まれやすい状況だということだ。ここに自由がある。日本的な同調圧力や型に嵌める文化はここには見られない。私自身も高校生の時ブルースに出会ってそこに惹かれたことを今も覚えている。また、リーダーが仲間に向かって呼びかけ、参加者が応えるスタイル。これは、広く教会におけるワシプリーダーの役割、すなわち、会衆の心を主へと導くことと同じではないか。現代の黒人教会の牧師と会衆の関係にも色濃く残る姿である。静かに形式通り主に向かうというよりは、皆が共感し合いながら自由な表現を持って共に主に向かうという共同体の姿である。

國友氏も指摘している通り、その姿は、その場に参加する者たちが互いに共鳴し、救いと癒しを生み出すと共に、「spiritual」という名の通り、「霊的」に満たすべく響き合う存在となるということ。そのスピリットは、現代のゴスペルにも息づき、今もなお人々を魅了し続けていると言えるのではないだろうか。

評者 塩谷達也（ゴスペルシンガー）

▶『日本における讃美歌』手代木俊一著 日本キリスト教団出版局

この書物は、「序」に端的に記されていますように、2008年刊行の単著『日本プロテスタント讃美歌。聖歌史事典 明治篇』以降に発表された論文・小論集です。全500頁余りの中、半数近い230頁を占める第一部「明治と讃美歌」は、2014年に明治学院大学に提出された同タイトルの博士論文の再録です。各章のタイトルがうまく内容を言い表していると感じますので、限られた字数の本稿ですがあえてここに列挙しておきますと、第1章「勝海舟と讃美歌 時代は蘭学から英学へ」、第2章「ゴープルと讃美歌 英語讃美歌から日本語讃美歌へ」、第3章「C. M. ウィリアムズと聖歌（讃美歌） 初期讃美歌の成立と他教派との協力関係」、第4章「来日宣教師の社会事業（盲人教育）と讃美歌」、第5章「日本の讃美歌、唱歌、及び替歌（南北戦争の歌）と19世紀アメリカの海外宣教」、第6章「植村正久と讃美歌 日本人最初の讃美歌論と『新撰讃美歌』」、第7章「島崎藤村、樋口一葉と讃美歌 キリスト教と詩歌 八六調と七五調」となっています。表題に特定の人物名を伴わない4、5章におきましても、章内のサブセクションには固有名詞がオンパレード状態であり、全7章の章立ては特定の人物と讃美歌の関わりを手掛かりに時代を読み解く試みである事が明瞭に伺い知れます。

第二部の小論集も、基本的にこの方法論は貫かれており、そこに基礎を置きつつも、個別の作品論・賛

手代木俊一
Teshirogi Shunichi

日本における 讃美歌 Hymnology in Japan

日本キリスト教団出版局

美歌作家論を超えた日本文化論、日本語論、明治期宣教論、大衆文化論、といった周辺領域にまで、時として議論は広がりを見せます。宣教師から日本人という人物研究の力点の変化と並んで、外国語讃美歌の翻訳から日本語讃美歌の誕生という言語論、さらには讃美歌の音楽的モチーフによる日本人の精神性へのキリスト教的なものの侵入とでも言った近代日本文化誕生の裏面、等々。日本のキリスト者にとっては大変興味深いトピックを考える手掛かりが、手代木氏の著作には満載です。第二部第10講の「琉球語讃美歌史」(pp.408-469)[共著]は、注と文献表のみで20頁を超えており、この領域における今後の議論の出発点となるものでしょう。しかも、1つの注の中身が長大なものも多々あり、凝縮に凝縮を重ねての60頁と言う意味で大変濃厚な仕上がりです。また、第二部の11講「讃美歌・聖歌とジャズ」は趣味の話のようでもあり、しかし手代木氏の自伝的要素も多々あり、書き口と人柄にギャップの大きな手代木氏を知ると言う意味で

は、意義深くもあります。

最後に手代木氏の作風とお人柄についてひとこと。手代木氏はもともと図書館員のご出身であられ、その文献学的な感覚は折り紙付きです。もちろんそこに立脚した讃美歌学各論も素晴らしいのですが、評者は手代木氏の日本の讃美歌学研究史における最大の功績は「明治期 讃美歌。聖歌集成」[全42巻 大空社](1996-1998)の編集にあると思っています。それらの史料の読み方のサンプルとして、そして議論のための補足史料として、その後の諸々の論文は記されているかのようであり、そこに手代木氏の著作全般の信頼性の高さの根拠があると感じます。かつて讃美歌については素人同然であられたフェリスの図書館員時代初期の手代木氏は、図書館員としての任務をより良く果たさんがために毎朝4時から8時まで出社前の時間を讃美歌の研究に充てられ、その20年に及ぶ累積の中から様々な成果物としての著作が著され、今やそれらが明治期以来の日本の讃美歌研究の礎となりました。市井の研究者も、大学の先生も分け隔てなく、共に研鑽を重ね研究史を蓄積する場として、2001年にはキリスト教礼拝音楽学会という新しい学会も立ち上げられました。日本と讃美歌と言うユニークかつ興味深い領域において、手代木氏の功績に続く一次史料に根差した良作が、あちこちから出現することを期待します。

評者 井上義 (等々力教会牧師)

▶『言葉を歌う グレゴリオ聖歌セミオロジーとリズム解釈』 佐々木悠著 教文館

筆者は1996年から3年間、「聖グレゴリオの家」附属宗教音楽研究所で教会音楽を学んだが、その際に橋本周子先生が教えてくださるグレゴリオ聖歌は、プロテスタントの牧師である私にとっても大変興味深い賛美に関する洞察に満ちた学びとなった。今となっては恥ずかしいことばかりであるが、当時の私はグレゴリオ聖歌のほとんどが何を唱える歌であるか知らず、角符記譜法で記された音符と上下に記された二種のネウマを参考にしながら歌う中で初めて聖書の御言葉を歌っていること気づいたのである。今回依頼を受けた佐々木悠著『言葉を歌う』のブックレビューは、かつて触れたグレゴリオ聖歌の世界の「全体像がどうなっているのか、歴史的経緯と現在、その先」を教えてくれる有意義な読書経験を導いてくれた。

本書は3章立てになっており、第1章は歴史的変遷を把握しやすい表を交えて概観している。私が学んだのは、セミオロジーが確立し、ネウマによる旋律修復がスタートした1980年代~1990年代。その後2000年代に入って新たな展開が続く。

ネウマによる写本が再発見された19世紀には、音楽として再現するために「リズム論」が必要とされ「ソレム・メソッド」が1960年代まで正統的な歌唱法として存在していたが、カルディーヌの提唱に端を発したセミオロジーは「ソレム・メソッド」の根拠を覆し、ネウマによる写本から周期的、計量的に捉えられるリズムが示されていると見做すことが不可能であったことは、今日さらに徹底して知られるべきことと思わ

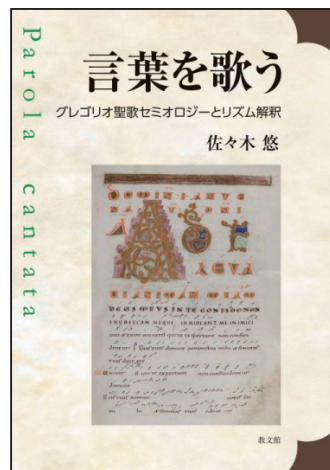
れる。御言葉を歌い始めた教会は、そもそも音楽的なリズムよりも、言葉そのものに依拠しつつ節を奏でたと考えられる。今日の賛美歌には拍子、小節線の表記の無いものもあるが、周期的なリズムに拘束されない歌がかつて存在していたことを知ることは大切と思う。

五線はおろか四線譜よりも遙か以前から存在していたネウマ譜は、言葉一つ一つをどのようなニュアンスで発声するかを伝えた記号であると言えるだろう。乱暴にすぎるかもしれないが、教会はある歌において旋律に乗せて御言葉を歌ったのではなく、御言葉を唱える仕方が教会の歌となったと言えるのではないか。グレゴリオ聖歌を学ぶ時に、その歴史の存在を知り、御言葉に音楽を付す作曲、御言葉を歌う歌唱に限りない示唆を受けることができる。

第2章には「音組織に起因するアーティキュレーション」として旋法のことなどがまとめられている。「旋法上に配置された音には、各々相対的な役割——音の方向性——が存在し、テキストやネウマのアーティキュレーションと密接に結びついている」(p.88)という指摘は確にかつて実践で教えていただいたことであり、詩篇唱の分析とわかりやすい表は今後も繰り返し参考にしたい。バロックのレチタティーヴォの歌唱を習った際「この音符をネウマで書くなら」と先生に教わった。各々の音が方向性を持っていることを理解して歌うことの大切さを感じさせられた。それが文法的解釈や御言葉に内在するメッセージと関連しているからである。

本書の最終章は「融化ネウマとテキスト解釈」と題して仮説が提示されている。歌唱に注意を促される融化ネウマの存在がテキストの解釈と深く関わっており、著者は特にアウグスティヌスの聖書解釈と聖歌の成立に関連性を発見しようとしている。ずっと時代を下ったJ.S. バッハの音楽作品についても、今日その時代の聖書解釈と音楽との関連を指摘する評論は注意深くなされているが、ずっと古いグレゴリオ聖歌について、このようなことが言えるのか、筆者に審判の力量はないが、グレゴリオ聖歌を歌っていると「なぜこの言葉にこのようなネウマが付されているのか」ということは考えさせられることであるから、真偽の結論は別にしても、神学と音楽成立の関連に注目している点は大変興味深いと言える。

評者 下川羊和（新潟福音教会牧師）



▶『賛美歌工房歌集Ⅱ』 賛美歌工房篇

「賛美歌工房」は2010年に発足し、毎月1回の例会を重ねながら地道に日本語によるオリジナル讃美歌の創作を続けてこられた団体です。索引によると、現在3名の作詞者と5名の作曲者が属しているようです。

ここに収録されている55曲は全て日本語のオリジナル賛美歌ですが、一見して分かる特徴が二つあります。



第一は、朗唱部分を含む讃美歌が十数曲含まれていることです。読むように歌う朗唱は、高低アクセントを持つ日本語を旋律に乗せる上で有効な作曲技法の一つですが、会衆での歌唱には一定の習熟が求められます。朗唱が日本の教会にどれだけ受容されるかは、今後の展開次第でしょう。私としては、作詞者と作曲者の緊密な連携によって、ことばのアクセントと旋律の問題を乗り越える良作が生み出されることを期待したいと思います。

第二は、全55曲中、歌詞が37件で、ひとつの歌詞に複数の作曲家が曲を付けているケースが多く見られることです。これを積極的に評価すれば、日本語讃美歌における新たな替え歌文化の創出と見ることができるでしょう。同時に、これは作曲についてアカデミックな教育を受けた信仰者は一定数いるけれども、そもそも作詞についてのアカデミックな教育の場が日本にほとんど無い現状を反映しているとも言えます。この労作を喜びつつ、作詞に携わる信仰者が多く起こされることを祈ります。

評者 中山信児

讃美歌詞公募案内

福音讃美歌協会・讃美歌委員会

私たちが普段歌っている讃美歌の多くは欧米の讃美歌の翻訳です。素晴らしい翻訳讃美歌も多くありますが、やはり歌詞も曲も、日本語を母語とする人の手によるオリジナル作品が求められます。

日本語のオリジナル讃美歌を創ることは、日本で育ち、日本で信仰と証しの生活を送っているクリスチャンに与えられた大切な使命です。福音讃美歌協会では、この使命を受けとめ、広く創作讃美歌詞を公募いたします。

■公募概要

- ・WEBセミナー「讃美歌詞と讃美歌創作」の視聴 ([YouTube](#) 視聴可) が応募の条件となります。
- ・応募は原則として、讃美歌委員会の用意した課題曲に合わせて、日本語で自由に作詞していただきます。
- ・構想、ラフスケッチの段階でも、1節のみでも応募できます。外国語を一部含んでも結構です。
- ・応募作品は、讃美歌委員とのやり取りを通して練り上げ、完成させる形をとります。
- ・優秀作品は、録音の上、今秋に行われる第2回WEBセミナーで紹介します。
- ・特に優れた作品は現在編集中の『あたらしい歌3』(来春発行予定) に収録いたします。
- ・その際、希望者には著作権管理団体ネクストーンへの著作権管理委託についてもご案内します。

■応募の流れ

- ・6月26日(土) 第1回 福音讃美歌WEBセミナー(当日Zoom / [YouTube](#) で公開)
「讃美歌詞と讃美歌創作 4人のクリエイターによるパネルディスカッション」
パネリスト: 岩渕まこと、神山みさ、土井康司、中山信兄
▼資料ダウンロード 「[パネリスト紹介と発題](#)」 「[作詞公募資料](#)」(課題曲等)
- ・7月10日(土) 作品応募締切(応募無料)
- ・作品応募から完成作品提出までの間、讃美歌委員とのやり取りを通して作品を推敲
- ・9月10日(金) 完成作品提出締切
- ・9月下旬以降 第2回WEBセミナー(日程内容等、調整中)

★応募方法

- ・讃美歌詞の応募は、メール (webinar@jeacs.org) でお願います。
- ・応募メールには、お名前、ご住所、電話番号、所属教会/教団、性別、年齢をお書きください。
- ・最初の応募(7/10 締切)は、歌詞の構想、ラフスケッチ、1節のみ、応募の意思表示だけでも結構です。
- ・課題曲に歌詞を付けて応募する場合は、課題曲の番号と歌詞を送ってください。
メールに直接記載するか、テキスト、ワード、PDFのいずれかの書類を添付してください。
- ・可能な場合は、歌詞(手書き可)を書き込んだ楽譜(JPEG、PDF、Finaleのいずれか)を添付してください。

リモート讃美「祈りが言葉にならなくても」377 ([YouTube](#))

讃美歌委員 植木紀夫

コロナ禍で「共に歌うこと」は大きなチャレンジを受けています。諸教会においても「マスクの中で小声で歌う」、「心はフォルテ、声はピアノ」、「黙唱」などさまざまな試行錯誤がなされていると聞きます。この状況にまだしばらく踏み留まりつつも「心をあわせて主を讃美する」ことを絶やさずになりたいと願います。讃美歌委員会では、そのための試みの一つとして、オンラインでのリモート讃美に取り組みました。

私がオルガンと指揮の動画を作成し、委員はそれぞれリモートで動画で見ながら歌います。そして各人が収録した動画データを重ねて一つに編集しました。

リモート讃美「祈りが言葉にならなくても」をお聴きください。また礼拝で使用する黙唱または小声で共に歌ってください。肩を並べて歌うという意味での「共に」とは異なりますが、リモート讃美を通してでも、オンラインでも私たちは讃美一つにできる筈です。

またこの試みが、コロナ禍における讃美の励みとなり、「心を合わせて共に歌う」ことの意味を深めていくことに繋がればと願います。

＊会計報告＊

2020 年 4 月～2021 年 3 月

■収入の部■

科 目	2020 年度予算	2020 年度実績
会員負担金	1,060,000	995,000
（正会員）	(750,000)	(750,000)
（準会員）	(60,000)	(60,000)
（賛助会員）	(250,000)	(185,000)
自由献金	450,000	350,600
積立金取り崩し	100,000	0
特別収入	0	0
その他	0	1
当年度収入合計（A）	1,610,000	1,345,601
前年度繰越金	861,738	861,738
収入合計（B）	2,471,738	2,207,339

■支出の部■

科 目	2020 年度予算	2020 年度実績
理事会費	115,000	16,000
委員会費	340,000	49,957
人件費	360,000	360,000
事務費	395,000	147,844
ジャーナル発行費	310,000	73,476
カンファレンス開催費	190,000	0
総会開催費	15,000	0
JEA 関係費	90,000	41,000
経常支出合計	1,815,000	688,277
特別支出 積立金	100,000	100,000
予備費	5,000	0
当年度支出合計（C）	1,920,000	522,216
当年度収支差額（A）-（C）	-310,000	557,324
繰越額／残高（B）-（C）	551,738	1,419,062

●賛助会費納入者・献金者一覧（2020 年 4 月～2021 年 3 月）

個人：刑部照美、北田直人、佐藤信行、篠田安子、田村勉、福田崇、藤本侃也、本間昭弘、山村雅彦、横倉知恵（10 件）
 教会：日本福音キリスト教会連合、武蔵台キリスト福音教会、前橋キリスト教会、世田谷中央教会、泉キリスト教会、橋本キリスト教会、千歳烏山光の子聖書教会、インマヌエル金谷キリスト教会、インマヌエル松戸キリスト教会、インマヌエル板橋キリスト教会、インマヌエル武蔵村山キリスト教会、都賀キリスト教会、馬天キリスト教会、上作延キリスト教会、千歳烏山光の子教会、結城福音キリスト教会、登戸教会、菅生キリスト教会（18 件）

お名前の掲載を希望されない場合は、通信欄に匿名希望とお書きくださるか、メール（info@jeacs.org）で、その旨をお知らせください。

夏期献金のお願い

主に感謝することは 良いことです。いと高き方よ あなたの御名をほめ歌うことは。。詩篇 92:1

主にある皆さま

聖い主の御名を讃美いたします。

いつも福音讃美歌協会のためにお祈りとご支援をいただき、心から感謝いたします。

コロナ禍での生活も1年半になろうとしています。初めて経験する大きな制約にとまどいつつも、新しい可能性に向き合っている方も多くおられるでしょう。福音讃美歌協会でも、コロナ禍で顕在化した諸教会の新しい必要に応えるため、今年度、三つの新しい活動に取り組みました。

▼第一はリモート讃美です。讃美歌委員とその家族が、大分、福岡、静岡、神奈川、東京を結んで讃美し、YouTubeに公開しました(本誌 p.6 参照)。▼第二は Zoom による WEB セミナーです。岩渕まことさん、神山みささんをゲストにお迎えした第1回セミナー(6/26)は、日本全国また海外も含めて60数名が参加し「讃美歌詞と讃美歌創作」について語り合う幸いな時となりました。今秋も讃美歌や著作権について考える WEB セミナーを複数回予定しています。お祈りとご支援、何より積極的なご参加をお願いいたします。▼第三にセミナーと連動して、讃美歌詞の公募を開始しました(本誌 p.6 参照)。優れた作品には録音や出版の道も開かれています。すでにセミナー参加者から10件以上の前向きな反応をいただいておりますが、この機会に、素晴らしい日本語の讃美歌が生み出されることを願っています。

このような働きはすべて、皆様のお祈りとお助けくださる献金によって支えられています。しかしながら、昨年来、新型コロナウイルスの影響もあって、自由献金、賛助会費はともに大きく減少しております。一方で、各種活動や移動の回数が減少したため、支出が減って繰越が増えていますが、教会の必要に応えるために新しい活動とともに継続中のプロジェクト(USB音源、『あたらしい歌3』、HP [情報ページ](#)充実等)を行うことを考えれば、非常に厳しい会計状況となっております。

福音讃美歌協会が、主の召しと教会の必要に応え、すべての働きを御心になって継続することができるよう、この夏も、お祈りとご支援をいただきたく、心からのお願いを申し上げます。また、正会員、準会員、賛助会員としてお支えくださる方々も引き続き募っております(詳細は[こちら](#))。ぜひご検討ください。皆さまの上に主からの豊かな祝福をお祈りいたします。

福音讃美歌協会 理事一同

◆郵便振替口座◆

番号 00220-1-95127

名称 福音讃美歌協会

◆ゆうちょ銀行口座◆

〇一八店 普通 7252410

一般社団法人 福音讃美歌協会

◆みずほ銀行ユーカリが丘支店◆

普通預金 番号 1604668

名称 福音讃美歌協会

■福音讃美歌協会 ◆賛助会員募集

- ・「賛助会員」は、福音讃美歌協会の趣旨に賛同し、支援して下さる教会や個人の会員です。
- ・賛助会員のお申し込みは、福音讃美歌協会までメールかFAXで入会申込書をご請求ください。
- ・賛助会員の年会費は、一口5,000円で、個人は一口から、教会は二口からでお願いします。
- ・正会員、準会員の詳細については、福音讃美歌協会まで直接お問い合わせください。



福音讃美歌協会 (JEACS)

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 2-1 OCCビル 602号室
Tel.03-5341-6920 Fax.03-5341-6921 (いのちのことば社出版事業部内)

ホームページ <http://jeacs.org/> メール info@jeacs.org

[Facebook](#)

[YouTube](#) チャンネル